

[097] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10169>

出版情報：語文研究. 97, 2004-06-04. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

〔会員著書紹介〕

辛島美絵 著

『仮名文書の国語学的研究』

本書は「国語資料としての鎌倉時代の仮名文書の総体的把握を目指し、国語史研究資料としての位置づけを試みる」ことを目的として著された一書である。従来歴史学の研究資料として利用されてきた古文書の、国語史の研究資料としての一面に着目したところに本書の画期的な意義がある。目次は左の通りである。

序 章 国語資料としての仮名文書研究について

第一節 古文書研究の歴史と意義

第二節 本書における方法

第一章 仮名文書の言語における 実用的対話性 について

第一節 「る・らる」の尊敬用法について

第二節 高頻度形容詞から見た仮名文書の 実用的対話性

第二章 実用的対話性 による口頭語の反映について

第一節 鎌倉時代の才段長音の開合と四つ仮名の混乱例をめぐって

第二節 シン語尾形容詞について

第三節 動詞活用の変化について

第四節 仮名文書に見られる口頭語的な語彙

第三章 実用文としての仮名文書言語の特色

第一節 仮名文書・古文書用語としての「明白なり」について

第二節 「ながし」の用法から見た仮名文書の表現の形成と伝統性

第三節 「つくしがたし」の用法から見た仮名文書の表現の形成と伝統性

第四節 高頻度形容詞から見た仮名文書の実用文としての特色

第五節 形容動詞語彙から見た仮名文書

第六節 助動詞じから見た漢字書き文書との共通性

終 章 各仮名文書類の国語学的特色と今後の研究の方向

なお、巻末に別表と索引が付されている。

これらの考察を通じて、著者は仮名文書の持つ 口語的要素を指摘するとともに、仮名文書が、実用文として持っている 表現の簡潔性、表現の様式性・伝統性 について指摘している。口語的要素 に関しては、他の多くの文献資料に見出しがたい特色であるという点で、今後の国語史研究に一つの可能性を示唆した。その上で、著者は今後、仮名文書の 実用的対話性 に注目することを国語学研究の一視点として提案している。

(平成十五年十月 清文堂出版 A5判 四八六頁 一一、
〇〇〇円)

白石良夫 校注

『本居宣長「うひ山ぶみ」全読解 虚学のすすめ』

国学の大成者、本居宣長が著した『うひ山ぶみ』(寛政十一年成立・一冊)は、今日の国語国文学研究にも受け継がれる学問観を論じたものである。「実学偏重の現代」にあつて「虚学のすすめ」たる同書に注釈を施すことで、校注者は虚学、つまり人文科学の意義を世に主張した。

同書に注釈を施すにあつて、校注者は次のように語る。
わたしが目指すのは、まず著者宣長との対話である。したがつて、注釈の基本は、宣長自身の学問や思想、あるいは宣長が生きた時代の学問や思想を土俵にして、『うひ山ぶみ』本文を読む、というところに置く。それと、もうひとつわたしの望むのは、本書(『うひ山ぶみ』注釈)の読者との対話である。

『うひ山ぶみ』という虚学をすすめる一書を介して、宣長と校注者、また校注者と我々、さらに言うならば、宣長と我々が学問を論じる、そのような注釈を校注者は心がけている。本書は、まえがき、凡例、本文・現代語訳、注釈、附録、

参考文献、あとがき、索引からなり、校注者の学問観を語つた附録の内容は次の通り。

虚学の論理

共和国は学者を必要としていない

仰げば尊しわが師の恩 仮名遣い覚書(一)

万葉集も現代仮名遣いで書こう 仮名遣い覚書(二)

本書を紐解くことで、本居宣長のみならず、校注者の学問観を目の当たりにすることである。

(平成十五年十一月 右文書院 B5判 一冊 二二二八六円)

春日和男 著

『語文叢考』

先著『存在詞に関する研究』、『説話の語文』の統編と位置づけられた本書には、昭和三十年から平成五年にかけて発表された論文二十三篇が収められる。全体の構成は以下の通り。

一、資料研究の部

一 三宝絵詞東大寺切(旧関戸家本・現名古屋博物館蔵本) 追考 / 二 撥音表記上の 限界と混乱の過程 特
に m・n の場合について上記のまとめ / 三 和泉往来
続貂 「レ」の用法に関して / 四 伊勢本節用集の一

〇〇円)

系譜 玉里文庫本と龍門文庫一本 / 五 来迎院本日本
靈異記用字用語管見 前田家本との異同を手掛かりに
/ 六 九州大学蔵「金剛頂瑜伽經第二」古点より / 七
蘇悉地羯羅經古点の一本より / 八 比較訓読試験

二、古典解釈の部

一 月面到達と形容動詞 / 二 萬葉集より / 三 文体と
解釈

三、国語学界展望の部

一 昭和三七・三八年における国語学界の展望総記 / 二
国語学 (昭和四〇年度) / 三 昭和四九・五〇年におけ
る国語学界の展望総記 / 四 国語学 (昭和六二年度) /
五 国語学五〇年の歩み 訓点語研究を中心に

第一部「資料研究の部」では平安中期から院政期にかけて
の訓点資料の考察が中核をなす。綿密な校合によって資料の
性格を浮き彫りにし、資料間の関連・相違が明らかにされて
ゆく。第二部「古典解釈の部」にも貫かれたその実証的な姿
勢は、読者に大きな示唆を与える。第三部「国語学界展望の
部」は著者によって記された国語学界の研究展望が収録され
ており、二〇世紀後半の学界の動向を概観できる。

以上のように、本書は著者の永年かつ広汎な研究をそのま
ま物語る一冊として、遍く迎ええられるものである。

(平成十六年一月 勉誠出版 A5判 四二八頁 一、二、六

今井源衛 著

『今井源衛著作集 第一巻 源氏物語登場人物論』

本巻は、『源氏物語』の登場人物論を中心に構成収録され
ており、細目は以下の通りである。

光源氏 光源氏像 政治と人間 光源氏の自己愛
色好みの変容 夕顔の性格 紫上 朝顔巻における
兵部卿宮 紫上の父 末摘花の造型 明石上につい
て 女三宮の降嫁 女三宮と柏木 浮舟の造型
夕顔・かぐや姫の面影をめぐって 源氏物語登場人物
の性格と役割 古典文学における人物造型の方法
「ただ言ひに言ふ」などのこと 「まことは」考
「おのがいとめでたし」考 伏せられた引歌 刈萱の
場合 「ためらひて」の語義 「あるやうあらむとお
ぼゆかし」 「さるは、罪もなしや」 夕霧巻「とに
かくに人目つつみを」の歌について 源氏物語と年中
行事 日本文学と年中行事

「解説」において中島あや子氏は、今井学の枢要な論は
『源氏物語』の作中人物論であると述べる。本巻所収の「明
石上について」(初出・昭和二十四年)は戦後に盛行した人

物論の先駆をなした。著者は、文学研究とは、「個体的人間の有機的構造を、そしてその生命を、作品の中から見出す作業を意味するだろう」と考え、「作品の世界にふかく沈潜し、原文に忠実にできる限り細密な分析を意図し、さらにそこから作中人物の一人を有機的に再構成し、その個体的統一を確保しよう」（『明石上について』）とする態度のもとに、主人・公光源氏論に加えて、『源氏物語』の女人像を論じる。「源氏物語登場人物の性格と役割」ではさらに、主要な登場人物四八名を挙げ、その出自・経歴概略・性格・構想上の役割などについて述べる。

また、後半には「まことは」「や」「ためらひて」等の語義を問い直す考証論文が収められる。著者は昭和四十五年から『源氏物語』（日本古典文学全集 小学館）の校注に従事した。およそ二十年間の校注作業の中で、語義の確認や一文の読解によって注釈上の重要な問題点を発見・解決しており、深い作品理解による解釈が本巻でも示されている。さらに、年中行事を取り上げ、歴史学の立場に寄らない、文学研究の課題として年中行事を取り扱う際のあるべき姿勢への提言もなされている。

（平成十六年一月 笠間書院 A5判 三六二頁 九、〇〇〇円）

ロバート・キャンベル 編

『読むこと』の力 東大駒場連続講義

本書は、本という「他者」といかに渡り合うか、というテーマのもと、東京大学で行われた連続講義を、一書にまとめたものである。その構成は以下の通り。

第一章 読むことから生み出される表現の力

「読む」「聴く」そして「時間」 林 望

装幀としての磁力 毛利一枝

第二章 他者の心を「読み解く」

翻訳者は「作者代理」か「読者代表」か 柴田元幸

ダイモーンの声を聞く 哲学書を読む 門脇俊介

意味の他者 を読む 野矢茂樹

第三章

断片のロジック 大貫 隆

奇跡物語の「心」

中世の遺言が言い残したこと コンスタンツ市民の遺言を例にして 甚野尚志

第四章

歴史的リアリティーとしての読むこと 神野志隆光

日記を読むことのリアリティー 齋藤希史

第五章

隠者の読書、あるいは田園の宇宙 齋藤希史

読み巧者の優美なる視線 読むことの苦楽 「美人図」詩とその周囲をめぐって

ロバート キャンベル

春本のエクリチュアー

浅野秀剛

パリ写真集 ことばと写真の交響

今橋映子

むすび 詩を読むよろこび

小池昌代 + 宮本久雄 + 藤井貞和

選ばれた「他者」の顔ぶれは、哲学書・遺言書・春本と幅広く、また交渉の術も音読・翻訳・装幀と様々である。読者は、一五人の「読み巧者」の文字通りの力業を存分に愉しんだ後、この多様さこそが、畢竟、本と、ひいては人と関わりゆくことの魅力なのだということに思い至るであろう。

読書によるよこびということの意味を、最も深いところから解き明かしてくれる一書である。

(平成十六年三月 講談社選書メチエ 293 B 6判 二九〇頁

一、八〇〇円)

入谷仙介・揖斐高・大谷雅夫・山本芳明

宮崎修多・杉下元明 校注

新日本古典文学大系 明治編 2 『漢詩文集』

本書には、幕末から明治を生きた五名の漢詩人の作が収録されている。すなわち、森春濤、中村敬宇、成島柳北、信夫怨軒、中野道遥。

収録作品と校注者は斯くの通り。

春濤詩鈔(抄)

入谷仙介・揖斐高

敬宇詩集(抄)

揖斐高

新編柳北詩文集

大谷雅夫・山本芳明

怨軒文鈔・怨軒遺稿(抄)

宮崎修多

道遥遺稿(抄)

杉下元明

補注

解説

『怨軒文鈔・怨軒遺稿』を除く四作は原文も備え、巻末には補注と以下六編の解説を付す。

森春濤小論(揖斐高)

詩人としての中村敬宇(同)

成島柳北の青春(大谷雅夫)

ジャーナリストとしての成島柳北(山本芳明)

信夫怨軒の文章演戯(宮崎修多)

『道遥遺稿』解説(杉下元明)

新体詩の進出により、ともすれば明治期以降の漢詩文は忘れられがちである。本書は近代的文学史のパラダイムの拘束から離れて日本文学史の流れを俯瞰することに資する貴重な一書である。

(平成十六年三月 岩波書店 A 5判 五二七頁 五、四〇

〇円)

今井源衛 著

『今井源衛著作集 第五卷 源氏物語の鑑賞・研究一』

本巻は『源氏物語 上』（創元社、一九五七年）と、『源氏物語への招待』（小学館、一九九二年）の二冊から成る。目次は以下の通りである。

源氏物語への招待

源氏物語の世界

源氏物語を探る

- 1 物語の時代設定
 - 2 ユーモアの諸相
 - 3 引歌・引詩の技法
 - 4 愛のかたち 「ものまぎれ」の実体
 - 5 宮廷行事の役割 御幸について
 - 6 「笛」巻の物語論
 - 7 女三の宮物語の発端
 - 8 「雲隠」巻の謎
 - 9 宇治の大君の死
 - 10 従者たちの役割
 - 11 「夢浮橋」巻の結末
- あとがき
- 源氏物語（上）
- はしがき

解説

作品とその鑑賞 第一部

桐壺 夕顔 若紫 末摘花 須磨 薄雲

附録 光源氏の世界

「源氏物語」はいっさいの理屈を超えておもしろい。要するに大切なことはそれだけだ」と『源氏物語への招待』の「はじめに」で氏は述べている。そしてこの古典の傑作たる『源氏物語』を享受し、鑑賞できる幸福を「学術書の体裁を避け」、「研究者相手の発言よりもいっそう重い責任を」感じて記したのが本書である。従来、研究史の中で用語として括られていたものを再検討し、その多様性を強調したものが『源氏物語を探る』の項にまとめられている。

『源氏物語 上』は西丸妙子氏の解説に言う、氏の「学問の出発点」とも言うべき本である。内容の大部分を占める「作品とその鑑賞」では本文に即して、作中人物の心情、作者の意図等が解説されており、そういった視点から捉えた解釈は戦前の『源氏物語』読解とは一線を画すものであった。『源氏物語』を「鑑賞」という目的で著された本書は、研究者のみならず一般読者にとっても興味を掻き立てられる一書となるであろう。

（平成十六年四月 笠間書院 A5判 三四八頁 九、〇〇
〇五）